

佳作

誰かのためじゃありません

福岡県 福岡県立筑紫高等学校一年 宮崎 鈴渚

私は小学校六年生のとき、「命」について深く考えさせられる体験をした。

小学校六年生の秋頃、休みの晴れわたった日に友達と楽しく遊んでいた。ジャンブルジムで鬼ごっこをしていた。今思えば本当に小学生だなあと思う。鬼ごっこをしているとジャンブルジムから落ち、そうとう痛かったことを覚えていて。特に右ひざは絶対に骨折か靭帯損傷かと思うほどやられていた。お母さんに公園まで迎えに来てもらい近くの整形外科を受診した。レントゲンを撮ってもらったがレントゲンでは詳しくは分からないからと大病院を受診することを勧められ後日、そこでMRIを撮ってもらった。数日後、検診結果を整形外科のころへ聞きにお母さんで行った。その時、お母さんだけ呼ばれ私は約三十分？一時間？ほど一人で待っていた。とても退屈していた。やっとお母さんが帰ってきたとき、お母さんの顔は少し赤かった気もしたが、特に声をかけることはしなかった。

じゃ〜この太いかもめまゆげともおさらばだあ！

正直すごく悲しかったけどそれよりもお母さんには笑顔でいて欲しい気持ちのほうが大きかった。

タブレットで骨肉腫について調べていると義足をつけてチアをしている女性が目に止まった。その人のチアをしている時の顔は輝いていた。私も義足をつけて何かスポーツをしたいなという考えた。バレーは周りの邪魔になるし、車いすバスケットはぶつかったら痛そうだなあとか呑気な事を考えていた。中学校はスカートじゃなくてズボンにしようとかも考えていた。

次の日、学校でみんなが体育をしている間、担任の先生と二人っきりで話をした。私はまだ自分ががんであることに実感がなくよく分からなかった。家に帰って一人で湯船に浸かり右足をなでながら静かに泣いた。そこにお母さんが来て、私のそんな姿を見て泣きながら一人で我慢しないで言ってくれた。本当に心強かった。お父さんもがんセンターで働いている知り合いに何度も電話をかけてくれたらしい。

一週間後、大きな総合病院に行き詳しく診てもらった。そして診断結果を説明された。

「鈴渚ちゃん、がんじゃないですよ。」

耳を疑った。お母さんも驚いていた。私はここで良かった：で終わるのでなく、何か手助けできることはないか考えた。そこで「ヘアドネーション」を知った。これ

家に帰ると、お父さんとお母さんの様子が変わった。お母さんは涙目でお父さんと二階へ二人で上がっていった。私は一階で妹とダラダラしていた。しばらくして二人が下に降りて来た時、お母さんは涙で顔がボロボロだった。

「どーしたん？」

と声をかけると、

「ちょっとここに座って。」

とテーブルに誘導された。何が起きてるか分からなかった。お母さんは泣きながらこう言った。

「鈴渚、骨肉腫って分かる？」

何のことだかさっぱり分からなかった。首を横に振ると、

「鈴渚の右ひざには骨肉腫っていうがんがあるの…。だからね、鈴渚の太ももの付け根くらいから切断しないといけない…。」

考える前にまず涙が溢れ出てきた。もう一度お母さんが話し始めた。

「も、もし、そのがんが肺に移したら、鈴渚が二十代で生きていられる確率は二十%くらいなんよ…。ごめんね…鈴渚。」

謝らないでほしかった。お母さんは何も悪くないのに。私はお母さんを元気づけたかった。

「がんで、葉飲んだら毛が無くなっちゃうんだよね?!

だ！と思えば元々長い方の髪をのばし、かつらを作るための髪を提供することにした。高校一年生の夏、行きつけの美容室で四十センチメートル髪をヘアドネーション用に切った。この髪の毛で病氣と戦っている誰かが笑顔になれることを祈っている。